



森のちやれんがニュース

2016 冬


博物館のホール右手の階段をのぼってみてください。目の前にあらわれるこの景色。お気づきでしたでしょうか。おおきな窓いっぱいであられる景色は、まるで屏風のように。

ここは、中二階にある『休憩ラウンジ』、みなさまのおくつろぎの空間です。木材をふんだんに使った天井、そこから下がる重厚な照明は、西洋のお城のよう。

窓際の席からは、野幌森林公園の緑を楽しんでいただくことができます。春の若葉、夏には豊かに生い茂った緑、秋の紅葉、そして雪景色。このニュースがお手元に届くころは、ちょうど雪景色…。

ひとときのご休憩。お弁当を広げるお客さまもいらっしゃいます。カフェでコーヒーや軽食をテイクアウトして、こちらで召し上がっていただくこともできます。

また『休憩ラウンジ』の入口には、道民のみなさまの資料や作品を展示する一画があります。現在は、北海道化石会会員ご所蔵のアンモナイトを展示しています。また、道内外の文化施設の展示会・講演会などのチラシやポスターを、入口近くに置いています。

北海道博物館がみなさまにご覧いただきたいものは、展示場にある展示物だけではありません。ぜひ、四季折々の風景をお楽しみください。



CONTENTS

- ② 研究交流事業紹介①招聘者インタビュー
オルガ=シューピナ、イーゴリ=サマリノ
- ③ 研究交流事業紹介②派遣職員インタビュー
甲地利恵、表溪太
- ④ 研究活動紹介「第2回特別展「ジオパークへ行こう！」を終えて」栗原憲一
- ⑥ 展示会予告「蔵出し展 アイヌ民族の造形美—北海道博物館所蔵の木盆—」大坂拓
- ⑦ アイヌ民族文化研究センターだより
- ⑧ 行事のおしらせ/活動ダイアリー

研究交流事業紹介①招聘者インタビュー

ロシア・サハリン州郷土博物館から研究者2名を招聘

北海道博物館は、ロシアのサハリン州郷土博物館と、カナダのロイヤル・アルバータ博物館と提携し、自然・歴史・文化、あるいは、博物館に関する共同研究を実施しています。本年は、サハリン州郷土博物館の研究者2名を北海道に招聘し、また、北海道博物館の職員2名を、カナダのアルバータ州に派遣しました。

サハリン州郷土博物館からは、オルガ＝シュービナ歴史部長とイーゴリ＝サマリノフ上級研究員を招聘しました。10月12日から26日の期間に、招聘者2名と当館職員は、北海道内各地で、共に調査を行いました。オルガさんは1987年、イーゴリさんは1991年に来道して以来、何度も北海道を訪れています。サハリンと北海道との関係やその変化のことを、お二人に尋ねました。

——お二人がはじめて北海道を訪れたから、20年以上が経過しますが、北海道とサハリンとの関係の変化をどのように感じますか。

(イーゴリ)北海道とサハリンとの往来は、特にここ15年くらいのあいだで、盛んになりました。以前に比べて、ビザ申請の手続きが簡単になったことや、交通事情の変化も手伝ってのことだと思います。それもあってか、サハリンの人々にとって、北海道は、以前よりずっと身近な地になったようです。その証拠に、北海道のことを呼ぶ新しい言葉ができました。



オルガ＝シュービナ
 Olga SHUBINA
 サハリン州郷土博物館 歴史部長
 Chief of the History Department,
 Sakhalin Regional Museum

イーゴリ＝サマリノフ
 Igor SAMARIN
 サハリン州郷土博物館 上級研究員
 Senior Researcher,
 Sakhalin Regional Museum

「ホッカイチユナ」という、親しみを込めたニックネームが、今では定着しています。

——北海道にはどのような印象を持たれていますか。

(オルガ)はじめて訪れた時から、北海道の自然が強く印象に残っています。札幌のような人がたくさん住んでいるところにも自然がのこされていることが、素晴らしいです。また、北海道の各地を訪れては、小さな町にも、博物館や郷土館があることに驚きます。意義のあることだと思います。

——北海道の人々に伝えたいことはありますか。

(イーゴリ)北海道とサハリンのあいだにある海は、壁ではなく、橋です。北海道・稚内とサハリン・コルサコフを結ぶ船は、北海道の方々の尽力で、廃止を免れました。その船で、是非、皆さんに、サハリンにお越しいただければと思います。

聞き手：春木晶子(学芸員)



枝幸町・オホーツクミュージアムえさし



小平町・旧花田家番屋

研究交流事業紹介②派遣職員インタビュー

カナダ・アルバータ州に当館職員2名を派遣

10月25日から11月6日の期間に、カナダ・アルバータ州で調査を行った職員2名にインタビューしました。

——どなたとどこで調査しましたか。
(甲地) 前半はエドモントンやカルガリーなど都市部で博物館施設などを見せていただき、建設中の州立のロイヤル・アルバータ博物館も見学しました。後半は、ロッキー山脈へ向かい、野生の生きものや植物など自然環境の観察をおこないました。

——どなたとどこでしたか。

(甲地) 気候は北海道に似ています。エドモントンからカルガリーやバンフへ向かう車窓からの景色は、「どこまでも続く十勝平野！」というか、どっちを向いても地平線が見える広大な平原でした。

(表) エドモントンも街から少し離れると自然の森林が残っていて、バイソンやビーバーに出会えました。ロッキー山脈のほうは、ほんとに「ロッキー(岩ごっこ)」！そして、野生動物がいっぱいです。



オオツノヒツジに遭遇



岩だらけの急斜面



研究主査 甲地 利恵

1962年、室蘭市生まれ。1994年より北海道立アイヌ民族文化研究センターに勤務。2015年北海道博物館開館に伴い現職に。専門は民族音楽学。アイヌ音楽を研究。写真はロイヤル・アルバータ博物館での楽器資料調査の様子。

——建設中のロイヤル・アルバータ博物館は、どうでしたか。

(甲地) バス駐車場に直結した団体専用の入り口が別にあったり、地下鉄駅に直結する入り口もあったり、来館者の利用しやすさを考えたいろいろな工夫がありました。子ども向けの広いスペースでは発掘体験のできる砂場も予定されているそうです。

(表) 収蔵庫も広がったですね。

(甲地) それぞれの研究部門ごとに収蔵庫と前室があり、研究室とつながっていて、とても仕事しやすい環境だと思いました。

——展示はどうでしたか。

(甲地) 生物展示のジオラマに感動しました！コヨーテの仔がじゃれ合うようすはまるで生きているようです。

(表) ジオラマはほんとにすごいですね。完成度は高いです。作ってみたいになりました。動物がメインのジオラマでも、生息地の環境が草の一本から忠実に再現されていました。

学芸員 表 深太

1987年、東京都生まれ。2015年より現職。専門は動物学。博士(理学)。写真は巨大草食恐竜との背くらべ。(ロイヤル・ティレル古生物学博物館)



——刺激を受けたところは。

(表) 参考にしたいところはたくさんありました。ひとつ取りあげれば「生きもの」の展示です。研究室でも生物を飼育しているんですが、展示場のなかにも「生きている」生物が展示として「いる」んです。こういう展示は、害虫やカビなど資料保存上の問題もあって難しいでしょう。だけど、例えば化石になった昔の生物と今の生物とのつながりを考えるのに大変役立つと思うので、北海道博物館でもぜひやってみたい展示方法です。

(甲地) 「interpretive center」ということばで表される新しいタイプの博物館のコンセプトを知ったことは大きかったです。(本紙 p.7 を参照)

——アルバータ州というとロッキー山脈とスキー場というイメージが強いですが、お二人のおすすめは。

(表) ロッキーでしょう！

(甲地) やっぱり新しいロイヤル・アルバータ博物館でしょう！

聞き手：出利葉浩司(学芸員)

研究活動紹介

第2回特別展「ジオパークへ行こう！」を終えて

学芸員 栗原 憲一

1979年、東京都生まれ。
三笠市立博物館学芸員を経て、
2015年より現職。専門は古生
物学、博物館学。博士(理学)。



「ジオパークの魅力を伝えるにはどうすれば良いのだろうか？」

これは、「ジオパーク」をテーマにした展覧会を企画する時、最初に考えたことです。そして、結論から先に言えば、答えは「無理」でした。

ジオパークは、地質・地形に関わる自然遺産を中心とした一種の自然公園です。そこでは、地域における科学的に価値のある自然・歴史・文化遺産などを保全し、その価値を教育や観光活動に活かします。一方、博物館は、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学などに関する資料を収集・保管し、研究してその価値を展示や教育活動などに活かします。

現地の景観そのものを保存し、そこでその価値を伝えるジオパークに対し、博物館は現地から切り取ってきたモノ(資料)を保存し、その価値を博物館で伝えるという違いがあります。したがって、ジオパークの「現地」そのものを博物館にまるごと持ってくることはできない以上、ジオパークの本当の魅力を博物館で伝えることは難しいのです。

項目	ジオパーク	博物館
見せるもの	現場(景観)	資料(切り取ってきたモノ)
情報量	多い	少ない
情報の整理	整理されていない	整理されている

ジオパークと博物館の違い

博物館は現地から切り取ってきたモノ(資料)を取り扱う分、情報は少なくなりますが、展示という手法をとって、情報を整理しわかりやすく伝えることができます。



動く恐竜・マイアサウラ(ハドロサウルス類)

しかし、博物館にしかできないことがあります。それは「演出」です。例えば、現地から標本化した資料を、ある1つのテーマに絞って来館者にわかりやすい順番に並べて展示したり、道内に5つあるジオパークの特徴を1つにまとめて展示することができます。

今回の展示では、1億年前に生きていたアンモナイトや恐竜、数万年前に生きていたマンモスなど、北海道を代表する古生物の移り変わりとその頃の古地理図をとおして、現在の北海道という島ができるまでの1億年にもおよぶ「時間」を知ることができる展示を作りました。特に動く恐竜・マイアサウラ（ハドロサウルス類）が子ども達に人気で、1億年前の太古の生物が目の前に現れたかのような展示に泣き出す子もいたほどです。

また、「大地はこうしてつくられる」という高さ1.8m×幅5.4mの巨大パネルも作りました。これは、各地のジオパークで産出する特徴的な岩石が、実際にどのような場所でできたのかが一目でわかるイラストを作り、そこに実際の岩石を貼りつけたものです。5月のゴールデンウィークから1,500人以

上の来館者のみなさんと一緒に作り上げました。

このように、今回の展示会では、博物館にしかできない「演出」とジオパークにしかない「現地」とが連携し、博物館からジオパークへ来館者が足を運ぶ導線づくりを行うことで、より深く北海道の自然・歴史・文化の魅力を発信しようと考えました。さらに、これまでジオパークと北海道博物館利用者の多くは50代以降が中心であったため、今回はあえて、小学生とその保護者世代にターゲットを向けることで、ジオパークと博物館の利用者層を広げようと考えました。

このような展示を開催した結果、7月9日から9月25日までの開館日68日間で、59,243人の入場者数を記録しました。これは、旧北海道開拓記念館時代をあわせて、平成に入ってもっとも入場者数の多い展示会です。特に、幼児、小・中学生の入場者数が多く、なんとその割合は50%以上でした。また、特別展の観覧後に、実際にジオパークへ訪れた方々も多く見られ、例えば三笠ジオパークへは約300人が訪れました。

今回の展示会は、決して「展示室」の中だけで収まるものではありません。ぜひ、現地へ足を運んでジオパークの本当の魅力を味わってほしいと思っています。そしてジオパークでは、周囲に広がる自然や景観、私たちの生活や文化が、大地や地球の成り立ちと密接に関わっていることを知ってほしいと思います。すると今度は、普段見慣れた目の前の景色が、これまでとは全く違って見えてくるはずです。「どうやって、あの山はできたのだろう?」「なぜ、あの文化はここで生まれたのだろう?」などと。そうなればもう、あなたはジオパークの世界の「見方」ができています。きっと、北海道の魅力と守るべき遺産の大切さを知るはずです。

最後になりますが、今回の特別展開催にあたり、多くの関係機関ならびに関係諸氏に多大なるご指導・ご協力を頂きました。また、一緒に展示を作り上げた7名の展示チームの皆さんには、展示や関連行事など様々な場面で支えていただきました。厚くお礼申し上げます。

栗原憲一（学芸員）



パネル製作の様子

来館者1,500人以上と一緒に、道内5つのジオパークの岩石を貼り付けて製作しました。



小学生とその保護者をメインターゲットとしたため、子どもたちが主人公となるようなキャラクター作りを行い、物語性のある展示を展開しました。

大地くん、めぐみちゃん、ナキウサギの妖精・オコトナ



「大地はこうしてつくられる」パネル

展示会予告

蔵出し展 「アイヌ民族の造形美—北海道博物館所蔵の木盆—」

12月22日から1月15日まで、蔵出し展「アイヌ民族の造形美—北海道博物館所蔵の木盆—」を開催します。「蔵出し展」と銘打つての展示は今回が初めてです。北海道博物館に収蔵されている資料の総数は約18万点に及びますが、総合展示で見ることができるのはそのうち約3,000点。ふだん収蔵庫で保管されていて来館者の目に触れる機会が少ない資料を紹介する機会として、「蔵出し展」は企画されました。

第1回として、アイヌ民族が製作した民具の中から、木盆を取り上げます。木盆は、アイヌ民族の伝統的な生活用具の一つであるとともに、江戸時代から北海道の特産品の一つとしても製作されていたことが知られており、2013年には、平取町に伝わる木盆が「二風谷イタ」として、北海道で初めて経済産業省の「伝統工芸品」に指定されるなど、高い評価を受けています。

当館には、大正時代に博覧会で展示するために作られた、直径97cmという大きなもの、戦後に北海道土産として様々な模索がなされたことを示す試作品、伝統を受け継ぎながら新たな創造を続ける現代作家の作品まで、多種多様な木盆約60点が収蔵されています。今回の蔵出し展では、これらの木盆を



はじめて一堂に集めて展示します。展示準備中には、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの山崎幸治准教授、二風谷民芸組合に所属する工芸家の方々が資料を調査されました。その成果の一部は、今回の展示に盛り込まれる予定です。これほど多くの木盆をご覧いただける機会は多くありません。皆様のご来場をお待ちしています。

大坂拓(研究職員)

研究職員 大坂 拓

1983年、北海道生まれ。宮城県教育庁文化財保護課を経て、2015年より現職。専門はアイヌ民族の物質文化。写真は収蔵庫にて展示予定の木盆と。



右上：木盆の彫刻

カツラ材で製作されたこの木盆は直径97センチ。現存する木盆として世界最大級で、同じようなものを作ろうとしても、今では木材の入手が困難だと言われています。大きさばかりではなく、流れるような彫刻は現代の工芸作家の方々が絶賛しています。



左・右下：北海道大学アイヌ・先住民研究センターの山崎幸治准教授、二風谷民芸組合に所属する工芸家の方々による調査

アイヌ民族文化研究センターだより

インタープリティブ・センター

“Interpretive Center”

— アルバータ州の先住民族文化の展示施設を見学して —

カナダのロイヤル・アルバータ博物館と当館との研究交流のため、2016年10月25日から11月6日、当館の表溪太学芸員と筆者(甲地)が派遣されました(本紙p.2-3を参照)。

滞在中、ロイヤル・アルバータ博物館職員とともに州内各地の先住民族文化の展示施設を見学しました。その中で、「interpretive center(centre)」ということばを知ったことが、今回の旅の大きな収穫の一つとなりました。

11月3日、フォート・マクラウド郊外にある、世界遺産に登録された「ヘッド-スマッシュト-イン・バッファロー・ジャンプ」の遺跡とその展示施設を訪問しました。ここは、「ブラックフット」と総称されている先住民族がこの遺跡の周辺を拠点としていた人びとが、バッファロー(ウシ族の動物)を追い落とし群れごと捕獲したという崖を臨む場所にある施設です。ここで博物館教育を担当するジェシカさんという職員からいねいな解説をしていただきました。

「この博物館(museum)では…」と質問しかけた時、ジェシカさんはちよつと間をおき「ここはmuseum(的)ではあ

るがmuseumとはいわない」と言います。さらに、ここの展示に関わっている先住民族の人たちは「museum」ということばを好まないとのこと。「museum=博物館」には、過去の歴史やモノをその文化から切り離れたかたちで展示する場所、といったイメージが、英語にもあるようです。

ではどう呼ぶのかと尋ねたところ、「interpretive center」という答えが返ってきました。確かに、この施設の正式名称は「Head-Smashed-in Buffalo Jump Interpretive Centre」であり、「museum」は使われていません。

この「interpretive center」をどう日本語で表せばよいか、よい表現が見つかりません。「interpretive」は直訳すれば「解釈の/通訳の/説明的な」など。その施設を取り巻く住民ないし文化を担う人びと自身が伝承の拠点として利用する施設、展示だけではなくさまざまな教育ないし啓蒙活動を繰り広げる施設、その施設のテーマを次世代にあるいは外部の人びとに向けてわかりやすく(つまりある意味で翻訳)、正確に自ら伝える活動の中心となる施設、ということのようです。

このことばと概念について無知だった私は、ちよつと衝撃を受けました。後で調べたところ、カナダでは1970年代頃から先住民族の権利をめぐる運動の高まりとともに、旧来の博物館に対する新しいタイプの博物館を指すことばとして使われ始め、かなり定着しているようです。

もちろん、「museum」を名のついても伝承・教育・普及活動を積極的に繰り広げている施設は、カナダにも日本にも少なからず存在します。単に名称の問題といえそれまでですが、そのような博物館のあり方を示すことばとして「interpretive center」があり、従来の「museum」に取って代わられつつあることを実際に見聞できたのは、今回の大きな収穫の一つでした。

北海道博物館という「博物館」の中でのアイヌ民族文化研究センターが、調査・研究を通してアイヌ文化の現在及び未来を創り出すことに貢献していくためにも、今回の経験を活かしていきたいと思っています。

甲地利恵(研究主査)



Head-Smashed-in Buffalo Jump Interpretive Centreの外観



入場券代わりのテープ
Head-Smashed-in Buffalo Jump Interpretive Centreでは、入場券代わりにこのテープを手首に巻いてくれます。施設のシンボルマークは、崖に追い込まれていくバッファロー達のシルエット。

行事のおしらせ

12月～3月

※ 行事の申し込みについては、『行事あない2016年度後期』もしくはウェブサイトをご覧ください。

展示会
蔵出し展

アイヌ民族の造形美
 -北海道博物館所蔵の木盆-
 12月22日(木)～1月15日(日)
 特別展示室・無料



北海道博物館第7回企画テーマ展
あったかい住まい
 2月3日(金)～3月31日(金)
 特別展示室・無料



秩父宮記念スポーツ博物館北海道巡回展
2020年東京オリンピック・パラリンピックがやって
くる
 2月3日(金)～3月17日(金)
 特別展示室・無料


イベント

ちゃれんが子どもクラブ
冬休みスペシャル① 稲わらで縄をつくって、長なわと
びに挑戦!

1月7日(土) 10:30～12:30
 講堂・無料
 担当/池田貴夫・舟山直治
 定員/小学生先着40名(メール受付)

ちゃれんが講座
古文書講座③ はじめての古文書・続編(全3回)
 1月8日(日)・1月22日(日)・2月5日(日) 13:30～15:30
 講堂・無料
 担当/東俊佑
 定員/先着100名(事前申込、12月9日(金)より受付)

ちゃれんが子どもクラブ
冬休みスペシャル② いのりのしるし? 絵馬づくりに
チャレンジ
 1月14日(土) 10:30～12:30
 講堂・無料
 担当/春木晶子・三浦泰之
 定員/小学生先着30名(メール受付)

ちゃれんが子どもクラブ
冬休みスペシャル③ アイヌ語であそぼう!
 1月21日(土) 10:30～12:30
 講堂・無料
 担当/田村雅史・大谷洋一
 定員/小学生先着20名(メール受付)

ちゃれんがワークショップ
自然観察会⑤ 動物の足跡を追いかけよう
 2月18日(土) 10:00～12:00
 野幌森林公園内(自然ふれあい交流館集合)・無料
 担当/堀繁久・水島未記・表深太・濱本真琴・扇谷真知子(自然ふれあい交流館)
 定員/先着40名(事前申込、1月19日(木)より受付)

ちゃれんが講座
古文書講座④ 古文書に親しむ(全3回)
 2月26日(日)・3月12日(日)・3月26日(日) 13:30～15:30
 講堂・無料
 担当/三浦泰之
 定員/先着100名(事前申込、1月27日(金)より受付)

活動ダイアリー

10月～12月

- | | | | |
|--------|---|------------------------|---|
| 10月1日 | ジオ・フェスティバルin Sapporo 2016(札幌市青少年科学館にて開催)に出展 | 11月3日 | 屋上スカイビュー開放
特別イベント「アイヌ音楽ライブ」開催 |
| 10月2日 | ちゃれんが講座「アイヌ語講座①アイヌの物語に親しもう」開催 | 文化の日講演会「漂着するクジラを追って」開催 | |
| 10月8日 | 第2回アイヌ文化巡回展「アイヌ語地名を歩くー山田秀三の地名研究からー」開幕(会場:美幌博物館、～11月27日) | 11月6日 | ちゃれんが講座「アイヌ語講座②アイヌの物語を聴いてみよう」開催 |
| 10月9日 | ちゃれんが講座「アイヌ文化研究の最前線①ロミン・ヒチコックがみた北海道・アイヌ文化」開催 | 11月13日 | ちゃれんが講座「アイヌ文化の世界」を語る① 日本の博物館収蔵の樺太(サハリン)アイヌの金属製口琴とその周辺」開催 |
| 10月10日 | 屋上スカイビュー開放
ミュージアムトーク「「漂着物」展直前みどころ案内」開催 | 11月20日 | かるちやるガーデン2016(Sapporo55ビルにて開催)に出展
ちゃれんが講座「文書のなかの「漂着」をたどる」開催
マンモスゾウ実物大模型展示終了 |
| 10月12日 | サハリン州郷土博物館研究者招聘(～26日) | 11月27日 | ちゃれんが講座「総合展示「アイヌ文化の世界」を語る②アイヌの儀礼用冠ー地域差と変化を探るー」開催 |
| 10月14日 | 第6回企画テーマ展「きれいな不思議?楽しい!?漂着物ー北の海辺でお宝みつけ!ー」開幕(～11月27日) | 12月3日 | ちゃれんが講座「古文書講座②はじめての古文書・入門編」第1回開催 |
| 10月15日 | ちゃれんがワークショップ「アイヌ民族の植物利用ーイラクサの繊維をとってみようー」開催 | 12月4日 | フォーラム「野幌森林公園の今ー10年間の動植物調査でわかったことー」開催 |
| 10月16日 | ちゃれんが講座「アイヌ文化研究の最前線②アイヌの木綿衣の刺しゅう その歴史をたどる」開催 | 12月11日 | ちゃれんが講座「総合展示「アイヌ文化の世界」を語る③「幻の建設」に込めた意志ーパチラー八重子らによる「アイヌウタリー中等学校建設」の活動ー」開催 |
| 10月22日 | 漂着物学会(共催事業)開催 | 12月17日 | ちゃれんが講座「古文書講座②はじめての古文書・入門編」第2回開催 |
| 10月23日 | ちゃれんがワークショップ「ムックリを作って、鳴らしてみよう」開催 | 12月18日 | ちゃれんがワークショップ「博物館で新年祈願!? 日本の画材で絵馬づくり」開催 |
| 10月25日 | カナダ・アルバータ州に職員を派遣(～11月6日) | 12月22日 | 「アイヌ民族の造形美ー北海道博物館所蔵の木盆ー」開幕(～1/15) |
| 10月29日 | ちゃれんがワークショップ「自然観察会④落ち葉の下の生き物をさがそう」開催 | | |
| 10月30日 | ちゃれんが講座「アイヌ文化研究の最前線③アイヌ口承文芸の「語りかた」をさぐる」開催 | | |

来館者数

○2016年9月～11月
 総合展示室 32,780人 特別展示室 23,548人 はっけん広場 9,307人
 ○累計(2015年4月～2016年11月)
 総合展示室 246,551人 特別展示室 180,612人 はっけん広場 59,091人

森のちゃれんがニュース 第6号

発行日: 2016年12月22日
 編集・発行: 北海道博物館
 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
 Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657
 ウェブサイト <http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>
 ©Hokkaido Museum, 2016